オーディオ実験室収載

アナログ再構成後の活用(3)
－ベートーベンを聴く(2)－

１．始めに

前報(2)に引き続き、ベートーベンのアナログ盤を試聴していきます。

２．アナログシステムについての改善の試聴方法

試聴は LINN LP-12 のシステムでアクセサリー関係も最新情報に基づいて実施し、要時 Garrad 401 のシステムも加えます。最新の状況は、再生経路と変更点 4 に要約しています。

今回取り上げる盤は次のアナログ盤 2 枚と CD です。

ベートーベン　トリプルコンチェルト

ピアノ、ヴァイオリンとチェロのための三重協奏曲 ハ長調 作品 56

ドイツグラモフォン 4836-399

フェレンツ・フリッチャイ指揮ベルリン放送交響楽団

ゲザ・アンダ（ピアノ）、ヴォルフガング・シュナイダーハン（ヴァイオリン）、

ピエール・フルニエ（チェロ）

Hi・Q Records HIQLP0006

カラヤン指揮ベルリンフィル

リヒテル（ピアノ）、オイストラッフ（ヴァイオリン）、ロストロポーヴィッチ（チェロ）

EMI Classics　50999-6　78705-2

カラヤン指揮ベルリンフィル

リヒテル（ピアノ）、オイストラッフ（ヴァイオリン）、ロストロポーヴィッチ（チェロ）

３．アナログシステムについての改善結果の試聴結果

ベートーベンのトリプルコンチェルトは、3 人のソリストを揃えることが困難なためか、演奏を聴く機会が多くはありません。そういうわけで、上記の盤は価値があります。

ドイツグラモフォン盤は、いかにも協奏曲といった感じで、フリッチャイは 3 人のソリストを支え、ソリスト達も相互に協調しています。

Hi・Q Records 盤は、協奏曲というよりは、3 人の大家のソリストにカラヤンが加わった独演の集合のようで、それぞれの個性が表に現れています。

どちらの盤も、アナログシステムの再構成とアナログアキュライザー他のアクセサリーの導入により、再生の難しさから多少敬遠気味であった、これらの盤の良さを味わえるようになりました。

CD は、ブラームスのダブルコンチェルトとカップリングされており、Hi・Q Records 盤とマスターが同じで、この他にもいろいろなレーベルから発売されています。

これまで、この CD の再生は難しかったのですが、再生経路にアナログアキュライザーを導入することにより、アナログ盤と同様、演奏の価値を認識できるようになりました。

４．まとめ

アナログシステムの再構成の結果、トリプルコンチェルトという難しいジャンルの曲のそれぞれの味わいを発揮できるようになりました。

以上